

地域イメージの捉え方とイメージマップの作成について～いわき市を対象として～

福島工業高等専門学校 学生会員 ○岩崎 廣和
正会員 齊藤 充弘

1. はじめに

近年、「地域イメージの向上」がまちづくりの目標の一つとなっている。地域のアイデンティティを確立し、住民はもとより多くの人々に認知され、より良いイメージを抱かれることは、交流人口の拡大や都市活動の発展につながるものであるといえることができる。一方、まちづくりの観点からは、住民一人一人が地域に目を向け、地域のことを良く知り、地域に対するイメージを共有することが、まちづくりに参加し、主体的に活動することに向けて重要視される。従来、都市・地域計画の分野においては、都市・地域の物的環境とそれに対して人々の抱くイメージを探り、より好ましい環境の設計に関する拠り所を得ようとする研究^{1)・2)}の蓄積をみることができる。地域住民の抱く地域イメージを明らかにすることは、地域特性や課題を導出することに繋がり、まちづくりのための基礎資料となるといえることができる。

本研究は、福島県いわき市を対象として、地域住民の抱く地域イメージを明らかにすることを目的とするものである。その上で、地域特性や課題についてアプローチし、今後のまちづくりに向けて必要なことについて追究していく。

2. 研究の対象と方法

(1) 研究の対象

本研究の対象とする福島県いわき市は、1966年10月に5市4町5村が合併し、太平洋沿岸から内陸は阿武隈山系にまでかかる面積1,231.3km²の当時としては最大の広域都市として誕生した。人口は、2010年の国勢調査によると342,198人の中核市である。合併後40年以上が経過しているものの、未だ旧市町村単位による見方や活動が多く、いわき市としての一体化したイメージをいかに共有することができるかが課題であるといえることができる。

(2) 研究の方法

地域住民のもつイメージの実態を把握するために、アンケート調査を実施した。調査の概要を表-1に示す。調査項目は、ケヴィン・リンチの「都市のイメージ」¹⁾を基本として、その後積み重ねられた住民のまちに対するイメージや態度と両者の関係について分析している既往の調査研究³⁾を基に作成した。その上で、調査の対象者については、地域の将来を担う世代である中学1年～高校3年まで学年毎に選定し、20代以上の一般を加えて調査を実施した。分析にあたっては、この年齢に着目し、地域イメージを構成する要素（エレメント）及び描いたイメージマップについて分析することにより、いわき市としての地域イメージについて追究していく。

表-1 アンケート調査の概要

調査期間	2010年9月～12月	調査方法	配票調査法
調査対象	いわき市内中学校、企業に所属する市民		
対象	配布・回収数	対象	配布・回収数
中学1年	81	高校1年	201
中学2年	87	高校2年	196
中学3年	67	高校3年	201
一般	79	合計	912
調査項目	●いわき市について ①思い浮かぶもの、②記憶に残るもの、③大切なもの、④どのくらい好きか(5段階)、⑤好きなもの、⑥嫌いなもの、⑦特色ある部分、⑧変えたいところ ●イメージマップの作成		
属性	性別、年齢、居住地区、通勤・通学先		

3. 地域イメージの捉え方と現状

(1) 思い浮かぶもの

「いわき市について思い浮かぶもの」として、総計1,724の回答を得ることができた。これを想起イメージとして分析すると、「自然」や「建築物」をはじめ、16の要素に分類することができた。その結果について、年齢毎に回答割合をみたものが、図-1である。これをみると、全体として海や山にみる「自然」の回答割合が38.5%と最も高く、次いで水族館をはじめ市内にある観光施設にみる「都市施設」が32.4%となっており、両者で全回答の約70%を占める形となっている。これを年齢毎にみてみると、「自然」については、一般において54.2%と高く、高校2年が46.2%、中学3年が35.6%と年齢が下がるにつれてその割合も低くなっており、中学1年では29.3%と最も低い形となっている。一方、「都市施設」については、中学1年において45.3%の回答割合と最も高くなっており、一般においては12.4%と最も低くなっており、「自然」における回答割合と対称的な形となっている。このことより、中学、高校の

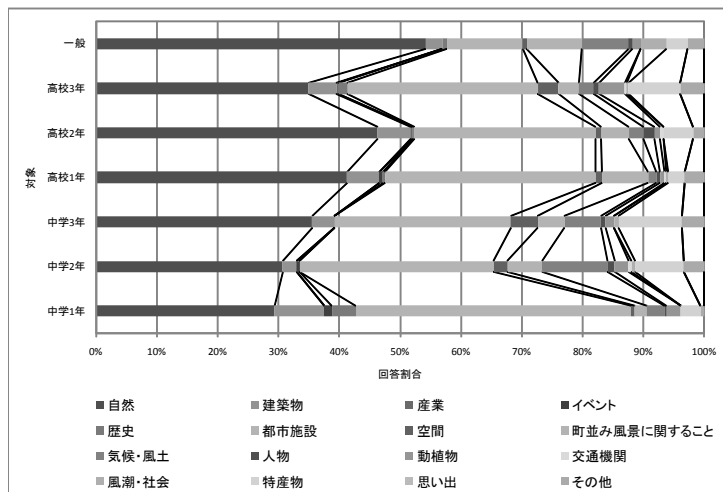


図-1 「思い浮かぶもの」にみる想起イメージ

キーワード：地域イメージ、イメージマップ、まちづくり、住民アンケート

連絡先：〒970-8034 福島県いわき市平上荒川字長尾30 福島工業高等専門学校建設環境工学科 TEL 0246-46-0830

年齢層においては「自然」よりは「都市施設」が思い浮かぶものとして多くイメージされており、20歳以上の年齢層においては、「都市施設」よりも「自然」を多くイメージしているといえることができる。

（２）いわき市に対する評価にみるイメージ想起

「いわき市がどのくらい好きであるか。」について、5段階評価で尋ねた。その結果、「非常に好き」（回答割合 10.9%）、「かなり好き」（同 23.4%）、「まあまあ」（同 58.0%）、「好きでない」（同 5.3%）、「まったく好きでない」（同 2.5%）となった。この評価を指標として、7つの設問における平均想起数をみると、「非常に好き」が 2.2 と最も多く、以下「かなり好き」が 2.0、「まあまあ」が 1.7、「好きでない」が 1.5、「まったく好きでない」が 1.3 というように評価が低くなるにつれて少なくなる形となっている。

4. イメージマップにみる地域の捉え方と現状

調査項目の最後に、他の人にいわきを説明するとき使用するための地図として、自身のイメージに基づいていわき市の地図を作成してもらった。これをイメージマップとして分析していく。

（１）作成エレメント

作成されたイメージマップについて、「都市のイメージ」¹⁾に基づいて、パス、エッジ、ディストリクト、ノード、ランドマークの 5 つに分類してエレメントを抽出した。その結果、作成されたイメージマップからは、総計 6,912 のエレメント（パス 1,015、エッジ 967、ディストリクト 1,256、ノード 928、ランドマーク 2,746）を抽出することができた。全体としてみると、抽出されたエレメントの中ではランドマークの割合が 39.7%と最も高い形となっている。これを年齢毎にみると、図 3 にみるようにランドマークについては、中学 1 年で 51.5%、中学 2 年で 51.3%の割合となっており、他の年齢と比較しても多く抽出されている。一方で、中学 1 年においては、パスの割合が 9.6%と全体(14.7%)と比較しても低くなっており、年齢によりイメージマップを構成するエレメントが異なる部分をみることができる。

この作成エレメント数について、先にみたいわき市に対する評価を指標としてしてみると「非常に好き」な人が 10、「かなり好き」な人が 8、「まあまあ」な人が 7、「好きでない」人が 6、「まったく好きでない」人が 10 となっており、「非常に好き」な人と「まったく好きでない」人のエレメント数が多い形となっている。

（２）イメージマップの分類

作成されたイメージマップについて、既往研究³⁾における分類を基に、大分類 5（A～E）、小分類 12 に分類した。その結果及び作成例について分析した結果、次のことがわかった。

A:全体の輪郭を描いている（作成割合 44.1%）；全体として最も多い形となっている。その作成例をみると、「Aa:イメージが、通い慣れた動線に沿ってまず形成され、そこから外に向かって作成していく例」を多く（同 16.3%）みることができた。その中で、中学 1 年、中学 2 年においては、「Ab:全体の輪郭が出来上がり、それから中心に向かって埋められていく例」の割合が 23.5%、17.2%と他と比較して高くなっている。このことは、先

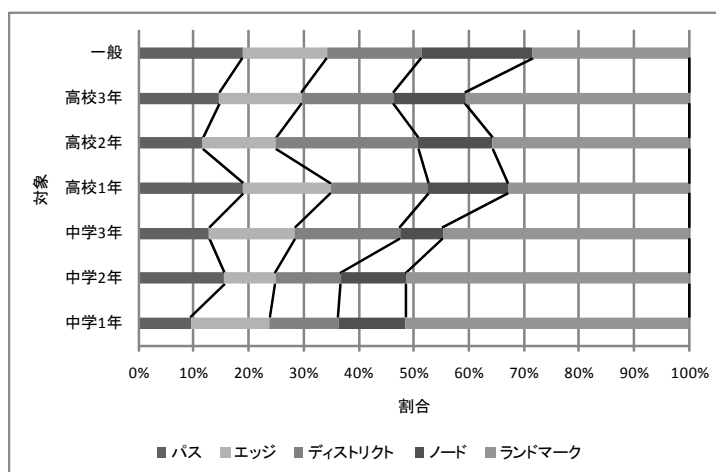


図-3 エレメントの抽出(イメージマップ)

にみたエレメントの抽出結果において、パスの割合が低い結果と対応する形となっている。

B:輪郭なし（同 17.5%）；「Ba:全体の輪郭を描くことなく鉄道沿線により地区を構成」する形が 2.7%、「Bb:部分的なもの」が 14.8%となっており、自宅や通勤・通学先を中心とする地区周辺を部分的に描く形が多くなっている。

C:イメージなし（同 9.2%）；「いわき市の地図」ということに戸惑い、イメージすることができないと回答する例が各年齢においてみることができる。

D:方角が反対（同 2.0%）；沿岸や内陸のディストリクトや都市施設が南北反対に描かれている例であり、特に中学 2 年（同 6.9 %）、中学 3 年（同 6.0%）を中心にみることができる。

E:日本、福島県からいわき市を抽出して描いている（同 27.2%）；より大きなスケールで日本列島や福島県を描いた上で、いわき市を描く例であり、特に中学 3 年では 41.7%と多くみることができる。

5. おわりに

本研究の成果により、次のことがわかった。

第一に、イメージ想起について、年齢により想起イメージが異なることがわかった。また、いわき市が好きという評価が高い人ほど、多くのイメージを想起していることがわかった。

第二に、イメージマップの作成について、年齢により想起するイメージが異なることより、イメージマップの作成例も異なることがわかった。また、日頃の活動する地区を中心に部分的に描く形が多く、いわき市が「非常に好き」という人や「まったく好きでない」という人ほど多くのエレメントを描いているということがわかった。さらに、イメージマップの作成例により、その特徴を具体化することができた。

以上のことより、今後のまちづくりに向けては、世代や層を超えて交流する中でイメージを共有することが重要であり、地域の魅力に着目し、「好き」という評価に繋げていくことが重要であるといえることができる。

6. 参考文献

- 1) ケヴィン・リンチ、丹下健三訳：都市のイメージ、岩波書店（1968）
- 2) 石見利勝、田中美子：地域イメージとまちづくり、技報堂出版（1992）
- 3) Roger M.Downs & David Stea, 吉武泰水監訳：環境の空間的イメージ、鹿島出版会（1976）